

令和八年六月吉日初版作成

「消えてゆく姿で世界平和の祈り」の

意義と実施上の留意点

高嶋 善三郎

目 次

- 「消えてゆく姿で世界平和の祈り」の意義・・・・・・・・・・・・・3
- 世界平和の祈りの神髄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 消えてゆく姿の原理と働き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
- 消えてゆく姿のみ教えの正しい行じ方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
- ◇人のせいにしたり、自分を責めない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
- ◇この祈りには悔いや反省が必要である・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
- ◇どんな苦しみや痛みがあっても、その中に入ってゆかない・・・・・・・・・・11
- ◇どんな苦しみからも逃げない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
- ◇消えてゆく姿の言葉は人をたしなめるように使ってはいけない・・・・・・・・・・12
- ◇すべての想いを祈りの中へ入れる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
- ◇今の自分は神の子、これから先の運命をうしなへ・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

お 願 い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

(ケータイ) 09033466019

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

「消えてゆく姿で世界平和の祈り」の意義

五井先生のみ教えの中核である「消えてゆく姿で世界平和の祈り」について、『日光誌から』にもついて整理します。

「消えてゆく姿で世界平和の祈り」の意義を端的に整理しますと、今日のように地球人類の最大危機にあたり守護神が結集され、降ろされたみ教えであり、この波動の低い未開の肉体界を開発（変容）し、愛と調和の世界を創造する、天命を持つ私たち人間が、善と悪、美と醜、天使と悪魔という二元対立の世界を、平凡な日常生活を営みながら私たち神人の心身を通して光一元の世界へと進化・創造する方法をやさしく実行できる道を開かれたことといえます。

この意義に関する五井先生のお言葉を具体的にみてみましょう。

「もともとやさしく悟りに達せられる道でなくてはと、念願して生まれたのが、消えてゆく姿で世界平和の祈りという道である。」（1971年2月号のページ）

「なぜ消えてゆく姿にしたかということ、一度に空になることは難しいわけである。」（1971年2月号17ページ）

「人類の滅亡を防ぐ方法を、無為の道や、空の道、神への全託として聖者が教えたのを、その方法を一段引き下げて、消えてゆく姿という方法にしたのである。」（1972年4月号13ページ）

「お釈迦様が現われ、キリストが現われても、この世界があまり幸せになっていない。なぜかというところ難かし過ぎた。

あまり真理が高すぎて、現実が低く離れすぎているから、どうしても出来ない。

そこで私は、人間は聖者ばかりではないから、扱われたらすぐ平和の祈りをして、消えてゆく姿ということを教えている。わざと教えを下げているのである。」（1972年6月号26ページ）

「肉体を持っている人間は、例え真理がわかってても、真理の通りには実行出来ない。そこでイエスのように上衣を取る者があたら下衣を与えよ、と言っても実際は出来ないであろう。苦しくなってしまう。

そこで私の立場というのは、真理を私を受けて、みんなにやさしく実行出来るように伝えているのである。

それがこの祈りになったのである。」（1979年7月号16ページ）

「消えてゆく姿で世界平和の祈りをしていると、最後の神意識が出てくるわけである。自分の本心が現われてくるわけである。本心と守護霊守護神との一体化が出来るわけである。悟る正覚を得るということ、祈りの世界から入れば、かなり簡単に出来るわけなのである。

まして世界平和の祈りのような、すごい光の祈りから入ると、如来さまになることが簡単に出来るわけである。多くの人が、仏菩薩になれるのである。」（1979年7月号23ページ）

「消えてゆく姿で世界平和の祈りという教えは、守護の神霊方が人類すべての苦悩を肩代りしてあげたい、というみ心でなされたものなのである。」（1979年2月号88ページ）

「消えてゆく姿で世界平和の祈りという中に、自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛するという、教義の中心的な想念行為が含まれているのである。」(1962年2月号のページ)

「やはり消えてゆく姿で世界平和の祈りというような、心の転換、想いの転換方法というのがなければ、この世の中はよくなるないのである。」(1966年8月号のページ)

「もともとこの世界は、神のみ心によって現わされた世界なので、悪いことのあるう道理のない世界なので、悪いように見えるのは、神のみ心がまだはつきり現わされていない、つまり神のみ心の未開発のところ、悪や不幸のようなあがきを見せて、消えてゆく姿(開発されてゆく姿)なのである。」(1959年4月号のページ)

「肉体人間の自己として、いかに業想念に負けまいとしても、到底だめなものである。肉体人間の自己をすっかり神のみ心に投げ入れた時に、人間の救われは完成されるのだ、そのための唱名念仏なのだという法然親鸞の教えは、今もはつきり生きているのである。それは私が説いている、消えてゆく姿で世界平和の祈りの教えなのである。」(1974年10月号のページ)

「すべての業想念や不幸災難に、把われぬ事が大事なのであるが、把われぬということは難しいので、消えてゆく姿と想って、人類の完全平和の願いを祈りにまで高めた、世界平和の祈りの中に、入れ切る生活をすすめるのである。」(1964年5月号のページ)

「神の子といひのは、守護霊守護神を足して神の子なのだから、守護霊守護神を足さなければ、神の子になれない。」

よほど前生、前々生で修行した人以外にはなれない。

人間の本心である神の子人間に戻るための梯子というものは、やはり守護霊守護神と消えてゆく姿というものでなければならぬ。守護霊守護神がいないと、愛と赦しが出ない」(1965年1月号のページ)

世界平和の祈りの神髄

世界平和の祈りは、五井先生と神界との約束事で、この祈りをするところに必ず救世の大光明が輝き、自分が救われるとともに、世界人類の光明化、大調和に絶大なる力を発揮するとされています。これをより深く理解できるように解説されています。

「今日のように地球人類の最大危機になってくると、個人個人の小さな欠陥の修正よりも、人類全体の欠陥の修正の方が大事なのである。

であるから神さまのみ心は、個人個人の小さな心の傷はどうでもいから、大きな傷の修正の方に、各自の精神エネルギーを使ってくれ、というみ心で世界平和の祈りによる人類救済の道を開かせたのである。

そうして世界平和の祈りをやっていると、大きな傷の修正になると同時に、いつのまにか自己の心の傷も全快してしまっているのである。」(1960年11月号のページ)

「すべての業想念や不幸災難に、把われぬ事が大事なのであるが、把われぬということは難しいので、消えてゆく姿と想って、人類の完全平和の願いを祈りにまで高めた、世界平和の祈りの中に、入れ切る生

活をすすめるのである。」(1964年5月号11ページ)

「喜怒哀楽、妬み、恨み、恐れという様々な業想念をつけたままでいい、ただひたすら世界平和の祈りを根底にして、生活していさえすれば、その人のそうした業想念は、私(五井先生)という濾過器を通して、いつのまにか浄め去られ、その人自体の心も生活も、いつの間にか改善されてゆき、それと同時に世界平和の祈りの本質である大光明(神のみ心)が、その人の周囲に、社会に、人類に、その人の体を通して放射されてゆくののである。

往相(道を求める姿)と還相(菩薩の姿)、救われたい想いが、そのまま人の世を救う光となって還ってくるのである。」(1958年9月号10ページ)

「今までの宗教には往相と還相とが、離れ離れになっていた傾向があつて、往相の人はいつまでも往相のまま(仏教的)、還相の人は還相のまま(キリスト教的)といった具合になりがちであつた。

ところが世界平和の祈りは、往相と還相とが同時に行われるのであり、自分の救われが同時に世界人類の救われになっているところに、今日までの宗教と根本的な相違があるのである。」(1963年10月号10ページ)

「消えてゆく姿だと思つた時、その人は悟つているのである。空になり、神の子の本心を現わしているのである。

世界平和の祈りは、消えてゆく姿を、更に積極的に光明的にする。つまり、往相と還相とが一つになった祈りなのである。」(1960年2月号34ページ)

「色即是空、空即是色ということを、やさしい行為にしたのが、消えてゆく姿で世界平和の祈りということなのである。

だから消えてゆく姿は、ただ消えてゆく姿だけで使つては、効果が少ないので、どうしても消えてゆく姿で世界平和の祈りというように、続けて使つているのである。」(1972年12月号20ページ)

「自分の本体は、神として直霊として天にあるのだ。世界平和の祈りをする時、その祈りは天の本体(直霊)や守護霊守護神と等しき祈りとなるので、その瞬間は肉体をつつむ業(汚れ)は一挙に突破されて、神我一体になるのである。肉体を動かしている生命と、宇宙に充満している生命との合体が祈りなのである。生命と生命の結びつき、宇宙神と直霊・分霊とが結びつくのである。

そして、神の力がそのまま流れ出て来る。自分の肉体頭脳が祈るのではなく、宇宙神に向かつて直霊・分霊が「私はあなたと一つです」と宣言するのが祈りなのである。」(1955年5月号25ページ)

「あらゆるものは、過去世の因縁の消えてゆく姿である。消えてしまえば、本来の命そのものの姿が現われる。完全円満性が現われてくる。そこでどこへ消してしまうのか。

神様の中へといっても、神様は見えないし、つかむことが出来ない。そこで神様のみ心であり、神様の理念であり、神様が望んでいる世界の大調和、平和、という神様の目的の中に消してしまう。

人間側から「世界人類が平和でありますように」という言葉で、祈りのひびきを出すと、神様の愛と人間の願望とが一つになって神と人間とがつながる。

そうすると、神様の大光明が流れてきて、人間の肉体も霊体もすべて神と一体化してゆくのである。神と一体化してゆくと、肉体から発する大光明波動、光の波が地球人類にふりまかれるわけである。」(1974年6月号17ページ)

「何か業が出てきた時、ああこれは消えてゆく姿なんだな、本当にこれは私の過去の因縁が、相手とぶつかって、私の業をはらして、本当に輝くような人間にしてくれるんだな、ありがたいな、というように思いこんでしまえばいいのである。」

思いこむ練習をする道が、消えてゆく姿で世界平和の祈りなのである。」(1964年7月号16ページ)

「感謝の想いというのは光なのである。助けて下さいというのは、業の想いである。苦しいんです五井先生、助けて下さい守護霊さんと言えば、黒雲が五井先生のところ、守護霊さんのところへ行くわけである。それによって助かるのである。だからそれもいいのである。」

しかしもっといいのは、世界平和の祈りと共に、守護霊さん守護神さん五井先生ありがとうございます、いつも感謝の想いが加わっていると、感謝したときに業がそのまま消えてゆくのである。」

だから貧乏でも病気でいいやな事柄でも、一番早く消したいなら、感謝することなのである。」(1979年12月号18ページ)

「靈魂を一人なら一人浄め救うと、それだけ徳が積まれ皆さんの魂が高くなる。魂が大きくなるといってもいい。光が強くなる。」

私も初めから強かったわけではなくて、だんだん諸霊を救っているうちに、だんだん強く大きくなって、今では無限大に大きくなれる

ような靈魂になっているわけである。皆さんも平和の祈りをしていると、靈魂を浄めるだけではなくて、自分の魂も強くなるということとを、しっかりと胸において下さい。」(1972年11月号49ページ)

消えてゆく姿の原理と働き

消えてゆく姿「の原理とこの言葉の働きを解説されています。」

あらゆる事象、自分のところから起こってくる変化(1972年5月号22ページ)はすべて消えてゆく姿であると解説されています。」

そして消えてゆく姿は、守護の神霊と一体になるための言葉であり、守護の神霊と一体になると、消えてゆく姿という祈りになると説明されています。」

「ただ単なる消えてゆく姿では、虚無的な、諸行無常的な匂いをもつが、その底に光り輝いている神仏、守護霊、守護神の姿を画き出すと、禍変じて福と為す式の光明思想となるのである。」(1956年4月号9ページ)

「私が消えてゆく姿を説いているのは、その奥にこの現象界の出来事は、何もかも時間的経過によって、過ぎ去り消え去ってゆくもので、変じ滅してゆくものである。ただ実在するものは神のみ光であり、神のみ心であり、神の理念のみであるという、真理があるからである。」(1958年12月号16ページ)

「消えてゆく姿というのは、善悪すべての想いや環境に、人の想いを把わせないために、表面に出して使っている言葉なのである。」

消えてゆく姿という言葉の奥には、永遠につながる善いもの本もの

の姿がはっきり存在していて、消えてゆくに従って、その本ものの姿がはっきり現われて来るのである。」(1966年10月号のページ)

「消えてゆく姿として出てくるのは、あくまで人間自体の本体、本心を現わすために、じゃまになる業生を取り去ってしまう状態なのである。その真理を知らない、そこに現われた不幸災難や、環境の悪さをしっかりとつかんでしまい、せっかく消したものを又つかんで放すことになり、二重の因縁として業生の層を厚くしてしまうのである。」(1967年4月号10ページ)

「人間は現在現われている状態を、実際に今起っている状態と思いがちであるが、現在現われている状態というのは、過去において人間の心の波の中にあつた状態が、今消えてゆくこととして現われて来ているので、そうした消えてゆく姿を把えてどうのこうのと言っている事は、ちょうど幻影をつかんで騒いでいるのと同じ事なのである。この原理を知ることが、宗教の極意でもある。」(1962年1月号11ページ)

「この世界は面白いように出来ているのである。善いことでも、裏を返すと困ったことになるのである。」

例えば愛することはいい事なのであるが、それが過ぎると執着になつて困ったことになる。いつも場所と場所が混つて、この世は出来ているわけなのである。

それは何故かといつて、この地球世界、物質世界といふものは、本当のものが出来てしまったら、存続しないように出来ているわけなのである。それで足りない所は、足りないといふのである。あるものは神様の

命だけ。神様だけが実在であつて、あとのものはすべて消えてゆく姿現われては消えてゆく姿である。」(1974年10月号18ページ)

「消えてゆく姿という言葉は、善人たちが少しの事や、過去になつてどうにもしようのない事で、自分を責めているのを、すっぱりと赦して下さるうとして、神様が私を通して、世界平和の祈りと組合わせて、説かせて下さつたものである。」(1979年9月号8ページ)

「現在現れているのは、自分の過去に放つた想念だけでなく、間違つた想ひ、神様を離れたこの世を「ほそ」といふ波が自分に感応して来て、自分の行為になつている。」(1962年10月号14ページ)

「業を取りながら、霊身の自分と肉体の自分が調和するために、肉体の生活のあらゆる経験を積んで、肉体にありながらも、神霊の世界そのままの、自由自在の行いができるようになる。そういう修行のために、いろいろな出来事が起つてくるわけである。」

それがある時には、その中の生命力で、この業がじまなものであるから、それを押し出そうとして、病気や不幸災難のような形に現われて、消えてゆく姿になつてゆく。」(1972年6月号16ページ)

「悪いことや嫌なことがあつても、それは過去世の因縁が、神様の力で消されてゆくのである。その人に一番都合のいいように、過去世の因縁が消えてゆく姿となつている。」

つまり守護霊さんが消して下さるのだから、何が出てきても、自分にとつて一番いい状態として出て来ているのだ、軽へ出して下さるのだ、といふように感謝して、守護霊守護神さんと一体になつて生きるということが大事である。」(1974年4月号21ページ)

「私の説いている、消えてゆく姿とは、この現象界で自分や自分の周囲に起ってくる悪や不幸は、その人の本心の現われるための、誤った過去世からの消えてゆく姿として解釈しているので、そうした消えてゆく姿が出てくるたびに、そこに本心が現われて、小さな悟りのような形になってゆくのである。

悟るということは、それが小さな悟りであっても、その人をおおっている業のすき間から、本心の光が少しく輝いたという事であり、人間が業生から、本来の神の子の姿を現わす一つの状態なのである。

であるからそういう悟りを何度か続けている内に、自分で気付かぬ内に、大悟の境地に近づいている場合が多いのである。」「(1976年5月号8ページ)

「消えてゆく姿の教えは、あくまで消えてゆく姿であって、肉体人間の側からは、決して消してゆく姿としてはいけないのである。」「(1960年6月号23ページ)

「職場で仕事をしている。これは消えてゆく姿、要するに消してゆく姿。光の自分が、つまり守護霊守護神分霊と一つになった神の子として、社会の業想念の中に入っている、その業想念を消している姿が、仕事場での祈りである。

だからいろいろな嫌なこと、自分に都合の悪いこと、辛いことがたくさん出てくるわけである。しかし、それは自分が悪いわけではなく、祈りが足りないのでもなんでもなく、消してゆく姿なのである。消えてゆく姿というより、自分が消してゆく姿である。

業の中に突っこんでいいるから、嫌なことが多いのである。それと自

分の心境が浅いという事とは違いある。

心境が浅いから悪かろうというのは、消えてゆく姿。だめだということも消えてゆく姿。社会人類の中に入って、職場の中に入って、消してゆく姿なのである。」「(1980年6月号18ページ)

「ぐちや怒りなどを、消えてゆく姿で世界平和の祈りの中へ入れてゆくということも、何度もやっているうちに、表面に出てもちょっとかすったぐらいで、ああごめんなさい、と謝るようになるのである。

その次にはかすらないで、ああ消えてゆく姿、世界人類が平和でありますように、皆の天命が完うされますようにと祈れるようになる。

もっとよくなると、行動の中に出ないで心の中だけで、ああこれはもう消えてゆく姿なのだ、みんなの天命が完うされますように、となってくる。

しまいには、もう出て来ない。ばからしいって、もうそのまま消えてしまう。その次になると、何も出て来ない。そういう段階があるから、焦せる必要はないのである。」「(1965年1月号23ページ)

「すべてのものは消えてゆく姿だと思って、自分の想いが乱れなくなる、把われなくなるまでには、大変な想いの修行がいる。日常茶飯事の当り前の生活の中で、ああこれは本当に消えてゆくんだな、あるものは神の生命だけなんだな、光だけなんだな、正しいことと、把われなくなるのである。

だから神さまと先に思えば、消えてゆく姿と思わなくてもよいのである。消えてゆく姿は、神の中に入る一つの梯子なのである。」「(1960年6月号31ページ)

消えてゆく姿のみ教えの正しい行じ方

消えてゆく姿のみ教えを正しく行じてゆく上で、留意すべき点を解説されています。私たち神人が、日々どのように想念行為をしたら、神の子としての自分を取り戻し、自分を愛することができるようになるのかを具体的に言及されています。

人のせいにしたり、自分を責めない

「消えてゆく姿」という言葉は、善人たちが少しの事や、過去になっただうにもしようのない事で、自分を責めているのを、すっぱりと赦して下さるうとして、神様が私を通して、世界平和の祈りと組み合わせ、説かせて下さったものなのである。」(1979年9月号8ページ)

「自分が悟ったと思っている時は悟っていない。だめだなあ、自分は何んてだめなのだろう、と思っている時は悟っている時である。」

だから私は、人が悩みながら来ると「あなた心境が良くなったね」というと、向うは実は悩んでいるのである。ところがその悩みが過ぎた後は、パッと上ってゆくのである。」(1961年4月号45ページ)

「一番むずかしいことは、想いが一杯かかっている場合、他人の想いがかかっている時もある、過去のものがドーッと急激に出てくる場合もあるのである。」

立派になる手前「、」の段階を上る場合に、非常に困難が起ってきだり、いろいろな嫌な想いが出たり、悪いことが出て来るのである。

今までいい心境だったのに、どうしてこんなと思う位に、悪いものが出てくる。その時が一番大事なのである。その時は一歩ものすく上げる時なのである。その時に一生懸命やるのである。」(1962年8月号20ページ)

「過去世からの業因縁がグルグル回って出て来るから、良くなったり悪くなったりしているように見えるけれども、それはラセン形に昇ってゆく時なのである。」

ラセン形というのは、下ったように見える時もあるが、そういう時は何か業が出て消えている時なので、業が新しく増えたのではないのである。中のものが消えてゆく時に、出て来るのである。」

そして、だんだん知らないうちに、高い所へ魂は昇ってゆく。下ったように見えても、本当は上っている。絶対下ることはない。」

人間というものは、道を求めて正しい道に入ったら、下ることは絶対にない。ただ、下ったように見えるだけである。」(1970年6月号9ページ)

「この肉体に生まれて来て、何にも苦しまないで、何にも嫌な想いをしないで、生きてゆくことはないわけである。何かしら苦しみがあり、耐えることがあり、悲しみがあって、そして業は消えてゆくのである。魂が鍛えられるわけである。苦しみがあった、悲しみがあった、嫌な想いがあった。」

そこで魂は浄められ、鍛えられる。鍛えられる時に、普通の場合はすべ人のせいにして、自分を責めたりする。」

せっかく魂が鍛えられて業が消えてゆくのに、そこで消さないわけ

である。」(1974年10月号18ページ)

「私の教えは、その場その場で、薬を飲みたい人は飲めばいいし、医者にかかりたい人はかかればいいし、自分で自分の責任を持たなければだめである。」

人が言うから仕方がないからとか、人の言葉に押されてやるとかやらないとかいう事はいけない。自分は本当は神の子なのだから、自分で全部判断のつくものなのである。

だから自分の運命は、自分で責任を持たなければならない。自分で責任を持ったその上に、五井先生の光が応援するわけである。

ところが自分に責任を持った人というのは、光をよけい早く出しやすい。本心が早く開発されやすい。

自分に責任を持たないでいつも、あの人のせいよ、お母さんのせいだ、夫のせいだとやっているのは、それは自分が弱いという証拠。消えてゆく姿を一つもわかっていない証拠。」(1964年4月号16ページ)

この祈りには悔いや反省が必要である

「自分の嫌なものが目の前に現われても、自分の心の中に現われても、これは消えてゆくのだなと思わなければだめである。消えてゆく姿だと思わないと、なかなか消えないのである。」

消えてゆくのだなと思つてはこういう事かというかと、再びいやな事はしないと誓うことである。」(1973年11月19ページ)

「もし間違つたことをしたならば、あっこれは消えてゆく姿だったのだな。神さまお許し下さい。世界人類が平和でありますように、みんなの天命が完つたされますように、とこうやると、それは悔い改めたわ

けである。」

悔い改めたら、もうそのことを思う必要はない。悔い改めた上にまた私が悪い、私が悪いとやるのは、昔の宗教のくせであるから、自分が悪いと思って、消えてゆく姿で平和の祈りの中へ持っていったら、あとは新しくどんどん、いいことをしていけばいいわけである。(1971年2月号10ページ)

常に自己の想念行為を反省するという努力、これは自分を責めるのではなく、自分の想念を省みて、これは消さなければならない想いと自分で想つたら、消えてゆく姿で世界平和の祈りをするのである。

自己反省と世界平和の祈り、自己反省をいかにすれば、消えてゆく姿ということになるのである。消えてゆく姿というからには、その想念行為を消し去って頂く、謙虚な想いが必要である。無反省な消えてゆく姿というものはないのである。」(1964年9月号11ページ)

悔いて反省して消えてゆく姿として、世界平和の祈りの中に入つていつてしまうのが、私の教えているところなのであるが、この悔いと反省と消えてゆく姿という想念が、瞬時になされて、ただ世界平和の祈り一本になつてしまふようになると、たいしたものなのである。

そうになると、自然法爾に過ちのない、真善美の行為が出てくるのである。」(1961年8月号11ページ)

「自分の欠点をちゃんと正直に認めて、神さまに消してもらつのである。そうすると消しやすい。認めないという事は、消えてゆく姿がないからである。消えてゆく姿というものを、はっきり掴まなければ

だめ。自分で悪いところを掴まえるのである。それで消えてゆく姿にしなければだめである。

いいかげんにごまかして、悪いことを言いながら、又しながら、消えてゆく姿なのよ、というのでは業の中をぐるぐる回りしているようなもの。それでは消えない。

消えてゆく姿というのは神さまの中に入れなければ。消えない。

消えてゆく姿なのだ。世界人類が平和でありますようにと、神さまの方へ持って行ってしまおう。そうすると神さまが消して下さるのである。「1996年1月号20ページ」

どんな苦しみや痛みがあっても、その中に入ってゆかない

「一般大衆と共に一緒に同悲同喜する、大衆と同化しながら大衆を導いてゆく、という立場もあるわけである。私はそういう立場である。イエスさんもお釈迦さんもそういう立場であった。

お釈迦さんでもいろいろな病気をしたり、痛みはあるわけである。ただ、どこが違うかというと、どんな痛みがあっても、苦しみがあっても、その想いが、心がそこに把われないのである。痛みの中に入っ
てゆかない。

苦しみの中に入ってゆかないのである。痛みは痛み、苦しみは苦しみ。そのまま流れて消えてゆく姿。想いが追いかけていかない。

みんなと同じように苦しみ、同じように悩み、同じ立場でいて、しかも同じにならない。和して同せず。痛みの中に想いが出ない、苦し
みの中に想いがいないのである。「1977年6月号23ページ」

「人が貧乏や病気など、いわゆる不幸で苦しんでいるのは、大きな高い目からみれば、本当はかわいそうではないのである。かわいそうだなと思うのは、肉体そのものが人間そのものであると想う感情から来るものなのである。今、不幸と現われている姿は、本当は天命を現わすために、不幸を消しながら、光へと前進している姿なのである。「1955年4月号19ページ」

「皆さんがもし病気になられたり、不幸や災難があった時は、病気は病気、不幸な事態は事態である。しかし心が動揺しなければ、病気は軽く済む。100%病気で心も痛みなければ、心が動揺しなければ10%、20%で済んでしまうのである。であるからあらゆる不幸な立場に立ち、あらゆる病気あらゆる災難に当たった場合は、心をふらふらさせないこと。心を神さまの中にスッポリ入れ、世界人類が平和でありますように、神さまありがとうございます。そればかりの中へ入ってしまうのである。そうすると一年かかるものなら三か月で治る、一か月で治るといふように、ずっと早く病気も治る。そういうものなのである。「1980年6月号18ページ」

「例えば自分の生活環境が苦しかったとする。病気だった、貧乏だったとする。しかしそれは過去世の因縁としてそこに来ているのだから、それは消えてゆく姿なのである。本当の自分は神様と一体なのだから、苦しいも入ったくれもない。ありがとうございます。神様あがとうございませうと言っていてくれなさい。「1975年7月号24ページ」

どんな苦しみからも逃げない

「人間というものは、永遠の生命を生かすためには、どんな苦しみをも逃げてはいけないのである。」

苦しみというものは、魂を浄めるものなのである。魂の進化のためには、あらゆる苦しみをなめ、経験することは必要である。それを超えることによって、魂は進化する。」(1979年11月号14ページ)

「自分の本心の光を常に乱している、欲しい、憎らしい、妬ましい、こうした業想念を消し去るには、自力では並々ならぬ大修行が必要なのである。」(1959年11月号10ページ)

「過去の因縁で、あるものは出てくる。出てくるけれど、それが感謝に変えられれば、10出てくるものは1しか出て来ない。それも魂を浄め、高めるための一つの修練なのである。修行が済めば、神様の方ではもう同じ問題を出さない。」(1974年11月号18ページ)

「業を取りながら、霊身の自分と肉体の自分が調和するために、肉体の生活のあらゆる経験を積んで、肉体にありながらも、神霊の世界そのままの、自由自在の行いができるようにする。そういう修行のため、いろいろな出来事が起ってくるわけである。」

それがある時には、その中の生命力で、この業がじゃまなものだから、それを押し出そうとして、病気や不幸災難のような形に現われて、消えてゆく姿になってゆく。」(1972年6月号16ページ)

消えてゆく姿の言葉は人をたしなめるように使っていない

「消えてゆく姿」という言葉は、自分自身の心の中の問題であって、人をたしなめるように使われてはいけない。他人に言う時には、この人

が救われますように、という祈り心を込めて、消えてゆく姿なのでよく聞かせるべきで、教えの通りいっぺんの言葉として、軽々と言ってしまったのでは、相手にとっては逆効果になってしまっただけなのである。」(1978年12月号5ページ)

すべての想いを祈りの中へ入れる

「現われてくる想いや事柄を消えてゆく姿として、どんどん世界平和の祈りの中に入れていくと、悪いものは消える。いいものは改めて増加して、光になって還って来るわけである。」

だからいいも悪いも、消えてゆく姿で世界平和の祈りの中に入れていくと、悪いものはどんどん消えてゆくと、いいものは倍加して幽体の中に入れてゆく。」(1962年8月号16ページ)

「善悪混淆の業というものは、すべて消えてゆく姿なのである。やったことは輪廻転生して、ぐるぐる廻っているのだから、行なったものは、自分にまた帰ってくる。」

一度いいことをする。そうすると、これが善いものは波長が合って、10にも20にもなって帰ってくる。悪いことをした場合に、そのまましておけば、10倍にも20倍にもなって帰ってくる。」

そこで、悪いことをした、人を恨んだという想いの上に、世界人類が平和でありますように、みんなが幸せでありますようにと祈ると、その憎らしいが消えてしまう。

悪いことをした、消えてゆく姿だ、ごめんなさい、世界人類が平和でありますように、というと、十字交叉して、業因縁の横にめぐって

いる波が、スーッと天に行って、天で消されて、今度は光になってかえって来る。その光が、十字交叉の点で横に伝わって行って、横の波として廻ってゆく。」「1998年12月号24ページ

「世界平和の祈り言をすれば、片方にどんな悩みがあっても、「世界人類が平和でありますように」という時には、光の柱に入っている。光のエレベータの中に入っていることになるのである。

それを、ある時はゆったりある時はやらなかったら、入ったり出たりしてなかなかなじまないわけである。

世界平和の祈り一念で行けば、光の柱にズッと入ったきりになる。」「1996年の月号18ページ

「世界平和の祈りの生活だからといって、何事も恐れない、一度も怒らないなどと言うのではない。

恐れても怒っても、直ちにその想念を消えてゆく姿として、世界平和の祈りの中に、投げ入れることの出来る幸福を、この人々は持っているのである。」「1990年の月号10ページ

「地上界をつくるには、想念というのは必要だったわけである。その業想念は役を果したから、役者が舞台から引き上げるように、どんどん消えてゆくわけである。だからそのまま放っておけばいいのである。

ところが人間の想いというものは、放っておくという事は出来ない。そこでその想いを持って、世界平和の祈りの中へ入ってしまうわけである。そして消えるのである。」「1980年の月号18ページ

◆自分神の子であり、これから先の運命をしようへ

「子供が悪いのも、お金が出来て生活が楽なものも、過去世の善行為、想念が結果として現われているのである。

いい結果も悪い結果も、今は結果なのである。過去世から今日に至るまでの想念行為の結果がそこに現われている。だから我々はどうしたらいいかというと、これから先の運命をつくるのである。過去のことはもう済んでしまっているし、今のものも済んでいるのである。

今、みなさんはこの道場に座っていらっしゃるけれど、過去世において済んでいるわけである。だからこれから先の人生、また来生、あるいは霊界での姿をつくる為に、これから努力するのである。」「1977年の月号7ページ

「肉体波動というものの、物質波動というものの中に入って、いろいろな練磨をして、苦しみや悩みを通りこして完全円満をそこで現わしてゆく。

そういうことが人間にとって非常に大事なことで、そうなることを神様は修煉としてやって下さるわけである。

そして肉体が進化してゆくわけである。そういう為に、神様がこの世界を創っている。」「1971年9月号19ページ

私たち神人は、現在神聖復活の印を日々組んでいます、その根底には「消えてゆく姿で世界平和の祈り」の精神が厳然として存在していることに気づきます。私たち神人は、より偉力のある神聖復活の印を降ろすためにも、あらためて「消えてゆく姿で世界平和の祈り」の意義等を正しく理解し、着実に実行していきたいものです。